

宋学の地方伝播

―北陸における清原宣賢の活動―

和 島 芳 男

目 次

- 一、宋学地方伝播の由來
- 二、能登および若狹における清原宣賢
- 三、越前における清原宣賢
- 四、北陸の儒風

一

宋学の地方伝播の著例としては西に南学の発達があり東に足利学校の興隆がある。南学ことに薩南学の祖といわれる桂庵玄樹は周防山口の人、南禅寺において無関普門の法裔景蒲玄忻に嗣法し、また蘭坡景菫の会下に参ずる一方岐陽方秀門下の建仁寺惟正明貞に就いて儒学を習った。応仁元年(一四六六)將軍足利義政の遣明使に随つて渡航、帰国後菊池重朝に招かれて肥後隈府の聖廟を拝し、次いで薩摩竜雲寺玉洞の請を受けて文明十年(一四七八)同国に移り、領主島津忠昌寄進の鹿兒島島陰寺に住して修禅のかたわら經書を講じ、また日向飢肥の島津忠廉のために同地の安国寺にいて外交文書を管した。桂庵はかの岐陽の儒釈不二の学統を受け、儒の尽性と禅の見性との調和する所をもって修養の急所とするとも

にまた捨身奉公、武士の本領を發揮する所に修學と練武との一致を見だし、武家社会における宋學の効用を發揚した。かつて岐陽が改定した經書の点法を桂庵が補正し、いっそう訓詁を容易ならしめたのも右の効用を大いに増進するものであった。文明十三年桂庵は薩摩の国老伊地知重貞とはかり、本邦において初めて大學章句を刊行したところ、士庶僧俗のこれをもてはやす者が多く、延徳四年にはすでに改版が行なわれるほどであった。桂庵の門流には人材が多かったが、中にも日向安國寺の後住一翁玄心の弟子にして桂庵の法孫に當る文之玄昌は上京して東福寺の熙春庵喜に学び、帰郷後講經に努めるとともに桂庵の点法をさらに修訂し、その普及を計った。ことに門人如竹が刊行した四書文之点が流布し、近世宋學の發展に直接寄与したことは著しい事實である。

次に足利學校は下野足利莊内における足利尊氏創立の學校である。足利莊には足利氏の祖義兼の大日如来信仰により鑊阿寺が創建され、以後この本願の素意に従い、寺中において毎年の講書始には大日經疏と周易注疏との講釈が行なわれた。その後尊氏のとき莊内に孔子廟と學舎とを設けたところ四方から來學の徒が幅濶するに至った。その教官には、はじめは京都から儒官を招いたが、後には禪徒の文字ある者が教授に當り、生徒もかの応永元年(一三九四)入學の島津元久の息仲翁守邦のごとく禪徒であるのが通例となったようである。當時足利莊内にはかの鑊阿寺の講經をはじめとしていくつかの教學施設があり、生徒はそれぞれの目的に従って各所で學んだが、この尊氏建立の孔子廟を中心とする「學校」には「省行堂」と称する本校生徒専用の病舎まで附屬し、まったく禪林の規矩に準じて運営されていたことは応永三十年仲秋の「學校省行堂日用憲章」の明示するところである。その後永享四年足利莊が室町幕府の直轄地となり、上じ憲実がその管理を命ぜられたが、憲実は同十一年正月宋刊本五經約百冊を學校に寄進し、次いで文安三年(一四四三)六月には學規を定め、學校における講義を従前通り四書・六經・史記・文選などに関するものに限ったほか莊内一般に対しても儒學以外の講究を禁制し、不律の僧侶の在莊を許容した士民はこれを嚴罰に処することとした。こうして憲実が足利莊を管理し、したがって莊内の學事に干与して以來足利の學校は僧侶のための外典専門の學校となり、そ

の庠主もいわゆる中興第一世快元以下歴代みな禪僧をもってこれに任じた。かくて永正六年(二五〇九)八月連歌師宗長が学校に立ち寄ったところには聖像のもとに諸国の学徒が雲集して盛観を呈したことであったが、下って享禄年間学校は火災にかかり、その後の乱世に際会していっそう衰退した。永禄三年(一五六)、第七世庠主九華は郷里大隅に帰ろうとして小田原を過ぎたが、北条氏康・同氏政父子の学校外護の約束を得て足利に帰任再住し、ここに学校はようやく隆運回復の緒に就いた。さて永享以来の学校の蔵書の中には新注書も相当まじり、ことに九華自筆所用本には古注書に新注を書き入れたものが少なくなく、その後の歴代庠主の書き入れ本に徴しても学校が年代を経るとともに、ますます多く新注を取り入れた趣は明らかである。ことにその訓法は清家点に準拠しながら関東の方言を参酌したという、すこぶる特色のあるものであった。しかしこれにもまして足利学校の名を天下に高からしめたのは学校の易学であり、本校の出身者は至る所の武家に易をもって仕え、軍配を見た。ことに第九世庠主三要その人が徳川家康に召し出され、みずから蓄策を取って従軍したことは最も有名である。このように足利学校の易学が随所において戦国諸侯の實際的要求に即応したことは、また程朱の易学ないし宋学一般の地方伝播のために多くのよき機縁を作り出したに違いないのである。²

この足利学校の庠主九代のうち第二世天矣が肥後、第七世九華が大隅、第八世宗銀が日向、第九世三要が肥前の出であることに注目し、薩南学と足利学校の教学との関連を想定する向きもあるが、両者に共通するところはむしろそれが林下の活動の成果たることである。元来本邦における宋学の受容が宋土の学者からの正統的伝承に依らず、彼我の間を往来した禪僧の提唱に候ったことは著しい事実である。宋儒と禪僧、宋学と禅学との相互研究はかの地においてはすでに久しい流行であったが、本邦において、古来祈禱教のみに慣れた貴族層のために禅法を挙揚しようとするならば、まずかれらの儒教の素養に訴えて宋学の特徴を説き、次に宋儒の尽性もついに禅の見性に及ばぬゆえんを明らかにするのが順当であり有効であった。かくてわが禅宗は貴族の経済と教養とを基盤として叢林の壮観を現出した

が、五山制の整備により禪門の独立が全うされた後も禪僧の宋学談義は五山文学と並んで叢林の花と栄え、ことに東福寺岐陽の儒釈不二論のごときは一世を風靡したものであった。このような禪門の隆昌は必然的に叢林に所を得ぬ人々を多数に生ぜしめたが、かれらは地方に分散して至る所に林下を形成し、しかも地方侯伯の需要に応じて文学を謗じ儒仏を論じた。薩南学といひ足利学校といひ、いずれもこの林下の活動のそれぞれの形態に外ならなかったのである。⁴

これらの禪家とならんで宋学の地方伝播のために別の動機から貢献したのは博士家である。博士家はその職責上、学令の規定に従い、主として漢代の古注を墨守し、律令制度の一般的弛廃を来した院政時代になってもせいぜい唐代の正義を参酌する程度であった。中世に入っては大学寮はいよいよ退廃して教授すべき学生も名のみとなり、博士の仕事といっても春秋二季の釈奠や時々の課試に形式的に携わり、あるいは宮中で御侍読を奉仕し、または貴顕の経筵に招かれて講釈・作文するくらいのことであった。この貴族の講筵は博士たちの最もよき収入源であった。しかるに叢林の儒仏論義が盛んとなり、公武の視聽をあつめるに及んでは博士家も対抗上みずから家学の革新を計らねばならなかった。ことに上代以来の明経家として中原氏と並んで朝廷に仕えた清原氏には業忠のごとき傑物が出て新注学の包容に成功し、その子宗賢の養子宣賢は清家学の遺産を継承するとともにその実家吉田家やまた吉田家から多くを伝受した一条家の学問からも大いに学んで新古二注折衷による清家学を大成した。清原氏がかように比較的たやすく家学を一新し得たのは、いうまでもなくその明経博士家たる累代の経業がよき素地をなし、古注から新注への展開を正しく理解することができたからであって、これは禅法拳揚のための方便として卒然宋学を提唱した禅家の人々も及ばぬところであった。⁵ただ不幸にして博士家が右の新しい境地を作り上げたとき、新たな困難がかれらに迫った。

(四六七)
応仁元年五月、細川・山名両軍が京中で激突したのは、清原業忠が卒して一カ月たたぬうちのことであり、以後十年余りの大乱が人々を窮乏に迫りやうした事実は改めてあげるまでもあるまい。学者・文人の地方流寓はここに始まる。

この場合地方側の受け入れ態勢は禅僧を迎える場合と必ずしも同一なるを得なかったであろう。禅僧と博士家と、講經の内容は同じであっても、武辺の生活になじみやすい禅僧と違って神經質で氣位の高い博士たちの接遇のためには、京都文化に対するいっそうの理解と、さらに積極的な憧憬とが必要な前提であったからである。この間の消息を、北国における清原氏の場合を通じてうかがうのが、すなわちこの小稿の目的とするところである。

注

- 1、足利衍述「鎌倉室町時代之儒教」五五三ページ以下
- 2、拙著「日本宋学史の研究」（吉川弘文館、昭和三十七年）二四四ページ以下。
- 3、西村時彦「日本宋学史」一四九ページ。
- 4、前掲拙著八七ページ以下。なお拙稿「中世禅僧の宋学観」（「魚澄先生古稀記念国史学論叢」所収、昭和三十四年）参照。
- 5、前掲拙著一八六ページ以下。
- 6、同二二三ページ以下。

二

清原宣賢は神祇大副吉田兼俱の三子で清原家に入って宗賢に養われ、（一五〇〇）明応九年二十六歳のとき従五位下に叙せられ、次いで直講・少納言に任じ、（一五〇三）文龜三年養父宗賢の死去により家督を継ぎ、（一五〇四）翌永正元年三月はじめて昇殿を許された。このころ宣賢は三条西実隆の知遇を得てその嫡子公条の師となり、皇太子知仁親王や將軍義尹のためにも書を講じた。これよりさき宣賢は大学章句および孟子趙注を書写し加點して父宗賢の証明を得たが、父の歿後も引き続き家本の手写点校に努め、ことに大学・中庸については新注、論語・孟子については古注を本としてそれぞれ家の定本を作り、いわゆる明經家の四書を整備した。中にも宣賢が大学章句講釈のために作った大学聴塵（大東急記
念文庫蔵）によれば宣

賢は一応新古二注折衷の態度を示しながら、しかも特に性説の發展の跡をたどって孟子から程朱に及ぶ学統を重視し、むしろ宋学に傾倒する趣を見せている。また宣賢が自点の孟子趙注（京都大）をもつて知仁親王の御読書に候したときの私記、孟子抄（京都大）を見れば、その尽心章句上の「尽其心者知其性也、知其性則知天矣」の解にも、他の諸例と同様にまず孟子の集注を引用し、その次に「尽其心」は内典にいわたる「直指人心」であり、「知其性」は「見性」、「知天」は「成仏」であるとするなど、五山僧さながらの禪儒融合論を述べ、次に右の章句の後文「存其心養其性、所以事天也」の集注「心者人之神明、所以具衆理而応万事也」を解して「言ハ心者神明之舎、具衆理、心之体也、応万事、心之用也」と説くあたりでは実父兼俱の吉田神道を応用し、なお論語集解に關する講案、論語聴塵（京都建仁寺）の爲政篇「攻乎異端、斯害而已」の章で道仏二教を「儒教ヨリ異端トキラフタル心」を説明する所では一條兼良の大学童子訓の所説を祖述した。

これよりさき大永元年（五二二）四月、宣賢は少納言を罷めて從三位に叙し、翌二年三月侍從に任ぜられ、同六年十一月正三位に昇った。翌七年五月、宣賢は「かものさと、ひとところなど」の所領を大徳寺大仙院に売却することにつき勅許を仰いだ。思うに家計の困難を切り抜けるためであらう。そして長祿二年二月十一日、五十五歳で出家して宗尤と号し、数日後越前に下向した。御湯殿上日記この年二月九日条には「せい三ゐ、入たうの御いとま申、御心へあり、二はんの事、色く申つれども、くわふんのよし仰せられて、ちよつきよなし」とある。むかし永正五年足利義尹將軍宣下（五二五）のとき、少納言宣賢は宮内卿丹波親康と参賀の位次を争つて勅裁を仰ぎ、幕府の裁許をも煩わしたことがあった。今また過分の二位昇叙を奏請したのも、文章博士出身の菅家の人々が多く公卿に立身し、晩年二位に昇叙される例に対し競争意識をかり立てられてのことであらう。こういう希望が、この最後の機会においてもついに遂げられない清家の現状も、宣賢をして望みを地方につながしめる一因となつたに違いない。もっとも今回の越前下向は実は能登の守護畠山左衛門佐義総の邸における講筵のためであり、宣賢はこの年六月二十七日から八月朔まで二十四回にわ

たり七尾の畠山邸において蒙求三卷中の二巻を講じ、八月二十七日一たん帰京、翌三年三月前約によりふたび能登に下り、同邸において蒙求下巻を講了し、なお中庸章句全篇と孟子趙注卷一とを講釈した。さらに翌四年閏五月宣賢は三たび能登におもむくため幕府の過書を待たが、今回の下向については詳らかでない。右の畠山義総は後年修理大夫に昇進し、天文五年^(一五三六)には將軍義晴の推挙で四位に叙せられ、やがて出家して後も毎々金品を能登から幕府に進めた。かれが宣賢を招き講筵を開いたのも、京都の文物に対するあこがれの一端に外ならなかったのである。

享祿五年秋、宣賢はまた北国に行き、七月十一日から八月九日まで、若狹小浜の栖雲寺で孟子を講じた。前記の孟子趙注の巻一の奥には、

享祿五年七月十一日十二日十三日 於若州小浜栖雲寺 ^{玉首座} 竹田舎弟 講之、

同じく孟子抄卷十の奥には、

享祿五年七月卅日、八月朔於若州小浜栖雲寺 ^{竹田舎弟} 玉首座 講之、

後日聞之、七月廿九日改元天文

とある。この栖雲寺については若狹國税所今富名領主代々次第の一色左京大夫詮範の条に、

応永九年五月、西御所一色^(餘範・詮範)殿父子の御台、相与に九世戸の御次に當國に御下向、

高浜其後^(小伝)當浜御一見、栖雲寺御座、御風呂栖雲寺のを造営ありて被入申、

とあるのが初見であり、次の一色修理大夫満範の条にも応永十四年五月、將軍義持が前將軍義満夫妻とともに九世戸参詣の帰途、當國木津庄の矢穴^(高浜町の) ^(名勝八穴)を一見して後小浜に来て栖雲寺に着き、夫人は玉華院に入り、諸大名がこれに候し、嚴^{かぎ}り舟^{ふね}二隻を浮べたとある。その後一色満範の二子義貫・持信がそれぞれ若狹・丹後を分領したが、將軍義教は義貫を忌み、永享十二年五月安芸守護武田信榮に命じ、大和在陣中の義貫を誅せしめた。信榮はこの功により若狹守護を兼ねたが、戦傷のため七月に歿し、翌嘉吉元年弟信賢が代わって入部し、若狹屋形と呼ばれた。以後小浜

も武田氏の所領となったが、この際栖雲寺は寺領安堵を得なかったらしい。蔭涼軒日録長祿二年九月十五日条に、

東福寺退耕庵末寺若狹國小浜栖雲寺同寺領不知行之事伺之、寺奉行布施下總守命之、

とある。退耕庵は性海靈見の塔所である。当時の栖雲寺はこの性海の法裔の住する所であったのであろう。

右の若狹屋形武田信賢の弟国信は寛正・応仁年中に御相伴衆に加わり晩年出家して、玉花院と号し、延徳三年六

月、五十四歳歳で歿した。国信の子信親は文明十二年十九歳で御相伴衆となり、同十七年八月わずか二十四歳で歿し、法

名を栖雲寺樹岳宗鉄といい、寺を後瀬山下に建てた。かれも若州屋形と称せられ、安芸国を兼領したという。おそら

く信親は一色氏時代の栖雲寺を後瀬山下すなわち現在の小浜市大原町二番地の栖雲寺の位置に移し、これをあらかじ

め自家の菩提所と定めたものであろう。栖雲寺現蔵の位牌によれば同寺は近世以来潤甫周玉を開山と仰ぎ、天文十

九年六月二十三日をもってその忌日とするが、なお同寺蔵の享保十八年制作の開山潤甫和尚頂相には和尚は武田伊豆

守元信の嫡子なりとある。この元信は新栖雲寺の開基武田信親の弟で、丹後一色氏の来攻を高浜にむかえ撃ち、逆襲

して丹後加佐郡を奪取して名をあげたが、大永元年十二月、六十二歳で歿した。守護職はその子元光がこれを襲い、

同じく伊豆守と称した。元信の子女にはこの元光の外に信賢と女子二人とが系図に見えるのみである。思うに潤甫は

嫡子に生まれながら早く出家人山したため系図に載らなかった者であらう。潤甫はなお建仁寺二百八十二世として

その名が見え、その法系は夢窓疎石—竜湫周沢—在中中滝—潤甫周玉となっている。そして建仁入院は天文十二年

八月二十七日のことであるから、これは晩年の栄達であったわけである。

さて前記孟子趙注および孟子抄の奥書に見える「竹田舎弟玉首座」は武田元光の舎弟潤甫周玉に外ならないであらう。当時は一寺の住持が首座の位にあることも珍しくなった由である。武田元光は系図に特に「歌人」と注せられた

人だけに都の文化に関心が深く、機縁を求めて明経道の書宿清三位入道宣賢を迎え、弟潤甫をしてその住持する栖雲寺において講筵を開かしめるに至ったものであろう。このときの宣賢の滞在が何か月に及んだかは不明であるが、七

月十一日から八月朔までわずか二十日の間に清家学の粋を尽した孟子の講釈を完了したことは、武田一族の好學のほどを思い知らせるものであろう。なお宣賢と若狹との関係につき注目すべきは現小浜市に伏原なる字のあることである。後年宣賢の玄孫秀賢の二男賢忠が伏原を家号としたが、これは清原家が伏原を知行したことに由来するものなるべく、この所領の存在が宣賢を若狹に引きつける一つの力となったことと考えられる。ちなみに若狹武田氏は元光の後、信豊・義統・元明と子孫相継ぎ、義統のとき永祿九年八月足利義秋が小浜に来て援兵を求めたが高浜城主辺見一族らが信長に心を寄せたため事成らず、元明はその妻京極氏の美貌が仇となり、好色の秀吉の命を受けた丹羽長秀のため天正十年七月近江に誘殺された。¹²かくて若狹武田氏は信賢以来八代百四十一年で滅亡した。栖雲寺もこの際当然武田氏と運命をともにすべきところ、とにかく近世にもその寺統を保つことができたのであるが、その間の消息は明らかでなく、しかも嘉永六年三月の大火に類焼し、現在はずかに本堂・庫裡を存し、臨濟宗妙心寺派に属するが、往時を語るべき史料はほとんど滅び、ことに宣賢の当地における業績を伝える何物もないのはまことに遺憾である。

注

- 1、拙著「日本宋学史の研究」一九九ページ以下。拙稿「清原宣賢とその家学」（『日本歴史』一八五、昭和三十八年十月）。今中寛司「清原宣賢の孟子抄について」（『京都女子大学文学部紀要』一四、昭和三十二年）。
- 2、公卿補任。御湯殿上日記大永七年五月十七日条。
- 3、公卿補任。
- 4、実隆公記永正五年七月および八月条。
- 5、京都大学蔵清家文庫本標題補注蒙求（重要文化財）各卷奥書。御湯殿上日記享祿二年八月二十七日条。京都大学蔵中庸章句卷末講了記。同清原宣賢自筆孟子趙注卷一奥書。後鑑二九七、享祿四年閏五月条。
- 6、後鑑三〇二、天文五年六月十三日条。以下同三〇四・三二二、天文七年より十一年にわたり関係記事が多い。
- 7、今富名は遠敷郡にあり、今の小浜市であり、したがって「当浜」は小浜のことである。九世戸は丹後切戸の文殊、高浜は若

狹大飯郡、現在の高浜町である。

8、応仁略記。武田系図。

9、後鑑所引親元日記。武田系図。

10、猶如昨夢集。

11、栖雲寺現住一瀬敬山師説。

12、武田系図。なお多聞院日記・信長記・朝倉記参照。

三

天文元年(一五三二)八月若狹における孟子講釈を終って後後京した宣賢は青蓮院門主尊鎮親王の御召をこうむり、翌二年二月

日本紀を講じ、次いで門主のために古文尚書を読み、八月には堺の阿佐井野氏の請いを容れ、家伝の一本を与えて論語集解を重版させ、みずからその序を書き、翌三年から七年にかけては尚書・毛詩の講筵を続け、八年には職原鈔

を、九年には南禅寺瑞雲庵東長老のために春秋左氏伝を、十年には宮中において論語を、十一年には私宅で蒙求を講ずるなど、学者として充実した年月を送った。そして天文十四年三月(一五四五)珍しくも孟子を進講して後、四月には越前に下

り、一乗谷の慶隆院において蒙求を講じ、十月一たん帰京、皇子方仁親王のために中庸章句を講じ、次いで十一月十三日から二十九日まで九回にわたり小御所において同じく中庸章句を後奈良天皇に進講した。朱子の章句のごとき新

注書の進講はすこぶる異例であるが、これは宣賢がこれこそ宮中における最後の奉仕と思ひ定めてのことであつたろう。御湯殿上日記この年十一月三十日の条には「せい三(清原入道)入(講釈)たうかうしやくけふ(番附)までにて、ひきに御かうはこたふ、

かたしけなきよし申す」と載せている。すでに古稀を越えた宣賢はこれを都における最後の思ひ出としてその冬のうちにまた越前に下つたらしく、翌十五年正月二十七日から二月八日まで九回、右の進講に用いた中庸章句をもって一

乗谷において講筵を開いた。そして四月から翌十六年三月にかけて、かつて若狭小浜の栖雲寺で用いたのと同じ本によって孟子の講釈を行なった。京都大学蔵宣賢自筆孟子趙注卷一の奥には、

天文十五年四月、於越前国一乗谷講之、三ヶ度、

同じく京都大学蔵宣賢筆孟子抄卷十の奥書には、

天文十六年三月十三日十六日、於越州一乗谷興雲軒新講之、
藏主発起之、

とあり、なお同書卷十四の奥書によれば終講は三月二十八日のことであつた。したがって越前における宣賢の孟子講釈は前後一年間にわたったわけであるが、これは宣賢の当地滞在が特に期限を附すべき筋のものではなかったからであらう。なお宣賢はこの天文十六年中に「越州私宅」において大学章句を講じ、また一乗谷安養寺でも同じ大学の講釈を行なった。そして翌十七年三月から五月まで、やはり安養寺において中庸章句を講じたが、その後の講筵ないし事跡については所見なく、天文十九年七月十二日、宣賢は七十六歳の老骨を一乗谷に埋めたのである⁴。

この一乗谷は朝倉氏の本拠である。朝倉氏は広景以来代々斯波家に仕え、敏景のときに至って三家老の一となり、(一四七)文明三年越前守護職に補せられ、一乗谷にその居館を構えた。この敏景がのこした家訓は朝倉敏景十七箇条として知られている。敏景の後、子氏景・孫貞景が相繼いだ⁵が、貞景が早く歿してその子孝景が幼少であつたから、貞景の弟越前敦賀城主教景(宗満)が孝景およびその子義景を後見して朝倉氏の隆運を維持した。永正十三年六月、孝景が大内義興の推挙によって大名の列に加えられたのも教景の輔佐の功であらう。孝景は若狭小浜の武田元光の妹婿であり、同十四年丹後の一色党が若狭に侵入し、高浜城主辺見一族がこれに呼応して武田氏に叛したとき、孝景はみずから若狭に出馬して姻戚の難を救った。翌十五年秋季孝景は建仁寺の月舟寿桂を招いた。月舟はかつて越前の弘祥・善応二寺に住した縁もあり、五山にあっては儒道仏三教の一致を説き、ことに程朱学と禅宗との関係についてはすぐれた見解を示した人であるから、孝景の啓発されたところも少なくなかつたであらう⁶。これよりさき永正九年(五二)の夏以後参

議菅原章長は越前に下り、同十一年五月帰京、翌年権中納言に昇進の後、同十三年十二月また越前に下り、十五年上洛、この間從二位に叙せられたが、大永元年五月官を辞して三たび北国に下り、同五年正月、五十七歳で一乗谷で歿した。章長の下向もたぶん好學の孝景の招請によることであろう。章長はかつて「今ノ天下ノ休ヲ見ニ、アサマシキ体也、就其、當時ノ武家ノ公事ノ体、一向道理ト云物ハタタヌ也、勝事也」と評したことがあるが、かれがこういう見地から孝景に何を教えたかは遺憾ながら不明である。ただ孝景はこのころ將軍義晴に近侍し、ことに大永七年二月、細川高国が將軍を奉じて近江にのがれたとき、これを助けて軍功があり、やがて義晴が帰京の時を得て後、参内するごとに孝景が万事周旋したので、天文四年四月將軍から塗輿を許された。この年十一月後奈良天皇御即位の資として万匹を献じ、翌年正月御座所用脚の請文を進め、同十一年五月幕府殿舎造営費として三万疋を寄せたのも、當時の朝倉氏の富強を物語るとともにまた孝景の上方文化に対する積極的関心を反映することであろう。

清原宣賢がはじめて越前一乗谷に來た天文十四年の春は朝倉氏の文華がかくも盛りなるときであった。当主孝景の夫人が若狭小浜城主武田元光の妹であり、したがって昔享祿年間に宣賢が小浜の栖雲寺で孟子を講じたときの同寺住持潤甫周玉の妹でもあること、朝倉・武田兩家の姻戚關係がすこぶる親密であることは宣賢もかねて聞き及び、越前という國、孝景という人にある親近感を抱いていたであろう。それに清原氏は越前にも所領を有したらしい。言繼卿記天文十四年十月条に、

十六日、丙午、天晴、環翠軒（實賢）從越前近日上洛云々、就知行分之儀、（高倉水家）藤黄門へ礼に罷度之間、予可同道之由申候間罷向、薄鳥子百枚燂遺之、入麵にて一膳了、
十八日、戊申、雲、環翠軒（宗尤清三位入道）礼に來、薄鳥子（五十枚）送之、祝着々々、一膳勸了、

とある。これによれば宣賢は自家の越前における知行分につき権中納言山科言繼の口添えにより権中納言高倉永家の周旋を得てよき解決に到達したものと思われる。京都大学蔵清家文庫本宣賢自筆大学章句（重要文）（化財）卷末講了記に「天

文十六、於越州私宅講之」とあるが、この越州私宅は朝倉領に遠からざる清家所領内にあったものと考えうべきであり、ここにも宣賢が朝倉氏の招聘に応じた一つの機縁が見いだされよう。次に越前における宣賢の講義が清家学の蘊奥を開顯するものであったことは、かの若狹における講筵に際しても用いられた孟子抄の完存により、的確にこれを知ることができるのは幸いであるが、なお別の方面から朝倉一族の学問的水準をうかがう手がかりとなるべきは宣賢の講釈の聴衆の顔ぶれである。言継卿記天文十四年十一月十三日条によればこの日から禁中小御所で始まった宣賢の中庸講釈には入道前右大臣三条西公条をはじめ按察使甘露寺伊長・権大納言三条西実証・同広橋兼秀・権中納言山科言継・大藏卿東坊城長淳・権中納言四辻季遠・同万里小路惟房・参議高倉範久・藏人頭広橋国光らが陪聴した。これらの中には単に役目の上から祇候した人々もあるうが、この進講開始の四日前の十一月九日、前権大納言万里小路秀房の邸で同じく宣賢が中庸を講じたときにこれを聴いた甘露寺伊長・亭主秀房惟房父子・実澄・言継・季遠・神祇伯雅業王・範久・右衛門督上冷泉為益・右中将庭田重保らは概して好学の思いやみがたくて参集した人々と認むべきであろう。この万里小路邸の講釈も右の進講とは同じ内容であったと思われるが、その進講のとき宣賢が用いた本は京都大学蔵中庸章句旧鈔の原本であり、その巻末講了記によれば宣賢はこの本を進講のときのほか能登畠山義総邸の講筵のためにも用い、今度また越前でも同じ本をもって講釈したのである。朝倉一族が京の公卿たちが好んで聴いたのと同じ講釈を再三傾聴したことは都を離れた老学者の寂しさをいやすにじゅうぶんであったろう。それだけに、この北国にこれほどの文運をもたらした朝倉孝景が天文十七年三月、五十六歳で死去したのは、かれの知己にたった宣賢にとっても一大打撃であったに違いない。宣賢が孝景の後を追ったのはこの二年後、天文十九年七月のことであったのである。

宣賢の嫡子少納言従三位業賢は享祿二年二月局務となり、天文十三年侍従に任ぜられたが、なおその後の経歴を公卿補任に徴すれば、天文十六・七年には「在国」、同十八年良雄と改名、同十九年正月正三位に叙せられ、弘治四年

(一五六〇)

から永祿三年までは「在防州」、同四年には「在国」、同七・八年また「在国」、そして同九年六十八歳で「在防州」、十一月三日卒去となっている。右のうち天文十六・七年の在国を当時の清家の知行所越前国にいたものとすればかれが父宣賢と同所に住むのはこれが最後となったわけであるが、永祿年間の在国はむしろ在防州と同義で、たぶん周防の毛利隆元のもとにあったと解すべきであろう。越前では朝倉孝景の歿後その子義景が十六歳で家を継ぎ、その曾祖父氏景の弟敦賀城主教景入道宗滴が前々代以来に引き続き宗家を後見したことは前にも記した通りである。朝倉宗滴話記によれば宗滴は「義景様の器用は英林様(義景の高曾父敏景)已来有間敷候か」と見込んで補佐の誠を尽し、ことに高齡をいわず加賀一揆の鎮撫に努めたが、一方では織田氏との關係に心を痛め、「但今三年存命仕度候、如斯の儀不至者、老につれ命をおしみ候事、おどけ者に候由沙汰すべく、全く命を惜候事にはなく候、織田上総介行末(命長)を聞届度念望計の事」と憂えながら弘治二年九月八十歳で歿した。このよき輔導者を失って後、義景はせっかく足利義昭の来投を迎えながら一向一揆に背後を衝かれるのを恐れて上京の機会を逸し、次いで本願寺と和し、叡山の衆徒と通じ、さらに近江の浅井長政と結んで織田信長に当たったが、元龜二年九月信長が叡山を焼き、次いで天正元年八月越前に侵入して一乗谷を陥れるに及んで義景はついに敵せず、四十一歳にして自殺し、朝倉氏はその祖父景の越前入国以来十一代二百三十年で滅亡した。昔若狭小浜から興入れた孝景の夫人武田氏すなわち義景の母もこのとき織田方に捜し出されて殺されるなど「不被当目様躰」であった。清原宣賢入道宗尤の一乗谷講筈の遺蹟もこのとき湮滅したらしく、かれの「越州私宅」のその後の消息もすべて不明に帰したのである。

注

1、言繼卿記天文二年二月条。建仁寺兩足院藏梅仙筆古文尚書卷十三奥書。京都大学蔵宣賢筆古文尚書卷十奥書。京都大学蔵天文

文版論語集解序。京都大学蔵清家文庫本毛詩鄭箋各卷奥書。同職原鈔宣賢識語。宣教卿記天文八年閏六月六日条。兩足院蔵

左伝抄識語。続史愚抄天文十年十月廿五日条。京都大学蔵清家文庫本標題補注家求卷中奥書。

2、塩尻三十六。京都大学蔵清家文庫本標題補注蒙求卷下奥書。言繼卿記天文十四年十月、十一月条。京都大学蔵中庸章句卷末講了記。御湯殿上日記天文十四年十一月条。言繼卿記によれば宣賢は十一月九日前権大納言万里小路秀房の亭でも中庸章句を講じた。

3、京都大学蔵中庸章句卷末講了記。

4、京都大学蔵清家文庫本宣賢筆大学章句卷末講了記。京都大学蔵中庸章句卷末講了記。公卿補任享祿二年条。

5、足利季世記。武田系図。月舟和尚語録。幻雲文集。

6、公卿補任永正十三年条以下大永五年条まで。高辻家譜。變旨記永正十七年六月二十九日条。

7、後鑑天文四年四月二十二日、十一月朔、同五年正月二十三日、同十一年五月二十四日各条。

8、藤黄門が高倉永家であることは言繼卿記天文二十二年閏正月条に「藤中納言永家卿今日大納言拜任云々」とあるので推知される。

9、清家の中庸講釈の内容を伝えるものに京都大学蔵清家文庫本中庸私抄二卷一冊（舟橋師賢筆）・同大学蔵中庸抄一冊（天文二十二年写）などがあるが、宣賢の講とは定め難く、いかなる講筵で用いたかも詳らかでない。

10、御湯殿上日記。

11、天文十六・七年在国のことは三条西元伯爵家および前田元侯爵家分蔵三条西実隆本、永祿九年十一月三日卒去のことは前田元侯爵家所蔵新写一本および宮内庁書陵部蔵松岡明義旧蔵本に独特の記載である（新訂増補国史大系第五十五卷公卿補任第三篇凡例）。

12、信長記。花見朔已「綜合日本史大系」卷八安土桃山時代五〇ページ以下。

四

本邦における宋学の地方伝播が一般に禅僧の先駆的活動に俟つところ多かつたことは顕著な事実であり、本稿のは

じめにあげた薩南学の場合もその著例の一つである。元來禪僧の宋学研究は「禦外侮」という實際目的から出発しただけに、これを講授するにもすこぶる積極的であった。かれらはまず貴顕の儒教的素養に訴えて宋学の特長を明らかにし、次いでこの特長の由来が宋儒の禪学摂取にあったことをあげて、従前祈禱教のみに慣れた公武の貴族たちに禪の直顯心性宗を理解せしむるに努めた。わが貴族層が果たして禪学を本質的に把握する意欲あるいは能力を持っていたか否かは、なお多くの疑義を存しなければならないが、禪林の枯淡な趣味は確かに貴族らの愛好するところとなり、かれらの外護のもとにいわゆる五山叢林の盛觴が現出するに及んでは、禪僧らも当初の目的を放下し、大檀那の風流に和するようになった。もとより叢林における宋学の研究・講授は引き続き行なわれて絶えるところがあったが、貴族にとっては宋学もかの五山文学と同様、異国的教養の一つであり、別してかれらの哲学的思考力を鍛えるというほどのものではなかったのではあるまいか。ましてこの叢林の貴族化にあきたらず、地方に流寓し、いわゆる林下を形成した人々にとっては禪宗と宋学との哲学的異同のごときはあまり問題とならず、ただ出間的な禪と世間的な儒学とを結びつけ、在家の生活における修禪の意義を了得させる程度が必要にして十分であった。かれらの講經の内容が地方の侯伯の家訓に反映し、武士の精神生活の指標となったのも、林下の儒学の実用的目的性によることであり、それは薩南学の場合にも明瞭に着取されるところであろう。この際当然想起される足利学校の場合にしても、それが終始武家の庇護下に立ち、その教官や卒業生らが学校名題の易学をもって軍政に直接奉仕しただけに、その学風において実学化の傾向がいっそう顕著であったのは怪しむに足りないであろう。

さて晩年の清原宣賢入道宗尤が遍歴した北陸三侯領のうち能登の畠山領における禪僧の先驅的活動については詳らかでない。これに対して若狹では一色氏の領知した時代に東福寺性海靈見の法裔が小浜栖雲寺に住したこと、武田氏の時代に領主の弟が再興栖雲寺の開山となったことは前述の通りである。右の性海は虎関の弟子で康永年間入元し、滞留はとんど十年にして観応二年(三五)帰朝、足利義詮・義満父子の帰依を得て東福・天竜・南禅の諸寺に歴住し、応永

(三九六)
三年東福寺退耕庵で入寂した。年八十二である。かれはその著書に自賛して「童稚競孔夫子之書、漏卮如盛水、壯歲學仏世尊之教、只染指而已」といった人であるが、惜しむらくはその集は多く散佚してかれの儒教思想をうかがうに足りず、まして性海の若狹における法裔が虎関一流の朱子学批判をどのように説いたか、またそれを武田氏一統ことに栖雲寺潤甫周玉がいかに継受したかはいっさい不明である。思うに能登においても若狹においても禪僧による講經の先蹤の、宣賢の講釈にとって負担となるほどに著しいものを見なかったのであろう。しかるに越前朝倉領ではすでに永正年間に大儒菅原章長の再三の下向を迎えるとともに一方では叢林の耆宿にして詩文をもって知られた月舟寿桂を請じた。月舟は儒道伝三教の交渉につき、

大学之道、在明明徳、在親民、在止於至善、此儒者之三綱也、天台吳筠著玄綱之篇、贊青牛之書、

此道家者之三綱也、五千余函之說、不過於戒定慧之三、此仏家者之三綱也、万目雖異、大綱則同之

云々、三教即一教、三綱即一綱、誰論万目有異哉、

と、老子の説よりも純然たる道教に調和を求めたこと、その性説において、

凡性之善惡、見于孟荀之書、韓退之文、宋儒性学、禹無間然、然吾徒所謂仏性、豈可同日而語哉、

といい、儒教に対する仏教の優越を認めながらもなお宋儒の見解に傾倒する趣を見せたことは足利衍述のすでに指摘したところであるが、ここに問題とすべきは、月舟のこれほどの卓見を朝倉氏一族が果たしてどれほど理解できたか、また月舟の講説が後の宣賢の活動のためにいかなる先駆的効用を発揮したかというところにある。

この第一の点については前節にいささか触れた通り、わずかに推察できるに過ぎない。第二の点については、まず三教の交渉についての宣賢の見解は論語聽塵為政篇、攻于異端の章の解に、

二教ヲ儒教ヨリ異端トキラフタル心、儒教ト云ハ天地万物ノ上ニ具スル当然ノ理ヲキハメ、君臣父子日用彝倫ノ外ヲハ出サルヲ、道教ハ天地未分ノ一氣ニ本ツキヲ、万物ノ上ノ理ヲハ是非共ニ是ヲ論セス、故ニ虚ニシテ無ナ

リト云リ、仏教ハ又人倫ノ常ノ道ヲ断棄テ、棄恩入無爲ヲ眞実ノ報恩トス、是世間有爲ノ事ヲ掃テ、無爲寂滅ノ法ヲ觀ス、故ニ寂ニシテ滅ト云リ、道教ノ虚ハ虚ニシテ無也、儒教ノ虚ハ虚ニシテ有ナリ、周茂叔カ無極而太極也ト云ル無極ハ所謂虚也、太極ハ所謂有也、仏教ノ寂ハ寂ニシテ滅ス、儒教ノ寂ハ寂ニシテ感ス、易ニ寂然不動ト云ハ、イハユル寂也、感而道通天下之故ト云ハ、イハユル感也、ココヲ以テ二教ヲハ異端ト云リ、という通り、すこぶる精細なものであるが、これは第一節にも記した通り、一条兼良の大学童子訓の祖述であり、ことに文中にいう道教が実は道教というよりむしろ老莊哲學である点において明らかに月舟の學說とは系統を異にする者である。次に儒仏の關係については月舟が当然儒を抑えて仏を揚げたのに対し、宣賢は中庸抄において、

不偏不倚トハ喜怒哀樂ノ未タ発セル前、一念未生ノ処也、教家ニハ眞如法性ト云イ、禪ニハ本来面目ト云イ、儒ニハ本有ノ理ト云、名異ニシテ理一ツナルモノ歟、

と、むしろ儒仏の一致を認めた。次に宣賢も宋學を推稱する点においては月舟と同じであるが、さすが歴代明経の道に携わった家の人であるだけに古注を無下に捨てることは当然しなかった。現に宣賢が能登・若狹でも、そしてまた越前の講筈でも用いた孟子抄を見ても、たとえば尽心章句上の「孟子曰、堯舜性之也、湯武身之也、久假而不歸、惡_二知其非有也_一」を解して、

漢儒・宋儒ノ見様カハレリ、漢儒ノ義ナラハ、喻ハ人ノ衣裳ナトヨ久ク借テキテ、不歸シテヨクナラハ、人皆其借手ノ物ト思ヘシ、主ノ物テナイト思者有ヘカラス、仁義ヲ借モ亦シカリ、(中略)宋儒ノ義ナラハ、五霸ハ仁義ノ名ヲ竊テ行テ、久假而不歸シテ、身ヲ終ルマテニ旧ヨリ我ニ有ケル仁義ト云事ヲ不知、初ハ仁義ヲ借テ人ヲ欺テ、終ハ我ニ有事ヲ不知シテ自ラ欺也、

と新古二注を併取している。しかも宣賢は一方滕文公章句上の首章の「孟子道性善、言必称堯舜」のごとき孟子の學說の眼目たるべき一節の解にも、

性トハ人ノ天ニ受ケテ生マルル所ノ理也云々、人ノ上ニ於テハ性ト云、天ニ在テハ理ト云、此ヲ理即性、性即理ト云、人ノ性ハ本体善也、世間ニ本性ノ悪キ人アルハ、皆氣質ノ性ノナス所ニシテ、性ノナス所ニ非ス、(中略)故ニ性ニハ全ク賢愚ノ異ナシ、氣質ニ依テ発処ノ情ニ、初テ賢愚ハ分ルル也、故ニ性ト云ハ、聖ニ在テモ増セス、愚ニ在テモ減セス、只同シ性也、如此人ノ性ハ根本善ナルト云事ヲ、孟子ノイヘル也、

と朱子の集注を増補、細説し、ことに「程子曰、性善二字、孟子拈前聖所未発、而有功於聖門、愚亦敢曰、性即理也一句、程子拈前賢所未発、而有功於孟子」と断言するほど宋学に傾倒したのは、孟子以来の性説が宋儒の学説の發展の最も中樞をなす基本線であり、したがってこの性説の確立が漢唐の古学に対する宋代の新学の最も著しい特徴たるべきことを的確に把握したからであって、これはやはり上代以来明経の博士家として古学について講究を積み、そのゆえにこそ古学から新学への發展の必然的内部的契機をも正当に理解し、しかも新古二学の異同、優劣についても妥當、公正な批判を下し、両者を折衷することもできたのであって、これは禅法挙揚の方便として卒然新学を取り上げた叢林宋学者の一人月舟の機鋒をもってしてもとうてい及ぶべからざるところであつた。したがって越前朝倉領における宣賢の講説をもって月舟説の継受と見るべきいわけはなく、月舟の越前における業績としては經学よりもむしろその詩文の才をもって朝倉領の文華に光輝を添えたことをもって第一とすべきであらう。

このように宣賢が活動した北陸三国においては、宋学の傳播に関する禅僧の先驅的活動の著しいものではなく、三国とも清家の新古二注折衷学にとって、まず処女地であつたと考へて大過ないようである。ただ惜しむらくは能登の畠山氏は加賀一揆に侵されて衰亡したし、若狹武田氏、越前朝倉氏の悲運は前記の通りであり、宣賢がせつかく播いた家学の種子も、ついに根を張り枝を茂らせ実を結ぶ運には恵まれなかつた。南学や南学史は成立しても、北学や北学史という者もない理由はここにおのずから明らかであらう。

注

- 1、性海和尚行実。足利衍述「鎌倉室町時代之儒教」二二五ページ。
- 2、幻雲文集。足利前掲書四三五ページ。

(昭和三十九年九月十三日稿)

Local Diffusion of Neo-Confucianism Kiyowara-Nobukata's Achievements in the Hokuriku Districts

I. Origin of Local Neo-Confucianism

To give examples of local Neo-Confucianism, we remember the Nangaku, Neo-Confucianism in the south of Japan, and Ashikaga Gakko, a Confucian school at Ashikaga. Since 1478 under the care of feudal lord Shimazu-Tadamasa, Keian, a Zen priest and one of the promoters of Nangaku, expounded the coincidence of Buddhist and Confucianist doctorines, contributing to religious education for his vassals. On the other hand, many graduates of Ashikaga Gakko, all being Zen priests, contributed more practically to *daimyos* in all phases with their excellent ability of divination according to the Yi-King, or Book of Change, which they had studied under the guidance of Gakko teachers and also Zen priests.

Zen priests were forced to learn how to explain Neo-Confucianism, because they had to appeal Confucianistic attainments of Japanese nobles in order to propagate Zen philosophy from which, to the contrary, the Neo-Confucianist had drawn many lessons. In spite of their conservatism, the confucian scholars in the imperial court were moved by the enthusiasm of the Zen priests and began to study Neo-Confucianism by themselves. Towards the end of the 14th century, they got full understanding of it, especially its difference from old Confucianism and its relation with Zen philosophy. However, since 1467, the greater part of Kyoto City was destroyed by the civil war. The scholars were driven to the country side carrying Confucian classics in their hands.

II. Kiyowara-Nobukata in Noto and Wakasa Districts

Kiyowara-Nobukata (1475-1500) was the most eminent head

of the old Kiyowara family lasting for many generations, and was one of the most representative scholars among his contemporaries. In 1529 he resigned his office and went down to Nanao, Noto. There, feudal lord Hatakeyama-Yoshifusa asked him to give lectures on "Mencius."

In February, 1532, Nobukata went to north again and stayed at Seiunji Temple near the port of Obama, Wakasa, where he gave serial lectures on "Mencius," sponsored by Takeda-Motomitsu, lord of Wakasa District.

III. Kiyowara-Nobukata in Echizen District

Since Nobutaka returned from Wakasa in August, 1532, he stayed in Kyoto for about ten years to give his last lectures in this old capital, until the end of 1545 when he left Kyoto forever for Ichijodani, Echizen District. From father to son all the members of the Asakura family, lord of Echizen, had been much interested in things Chinese. Especially Asakura-Takakage invited Gesshu, a Zen priest of Kenninji Temple of Kyoto, and Sugawara-Akinaga, a famous scholar on Chinese literature. When Nobukata came to this district, he was received so warmly that he gave comparatively advanced lectures on "Mencius," as well as on "Great Learning" and "The Doctrine of the Mean," all according to Chu-Hsi's interpretation thus making his old age comfortable until he died in this remote country in 1550.

IV. Academic Features in the Hokuriku Districts

In most cases in mediaeval Japan, local diffusion of Neo-Confucianism depended on Zen priest' precurrosy activity, yet it is quite unprovable in the case of Noto and Wakasa. Even in Echizen Gesshu seems contributory to Chinese literature rather than to Chinese philosophy. After all, though the Hokuriku districts were supposed to be virgin soil for the development of the Kiyowara school, it was fruitless because of sudden fall of the Hatakeyama, Takeda and Asakura families before the rise of Toyotomi-Hideyoshi's hegemony about 1590.